

ふるさと風

第63号 (2011年8月)

風に吹かれて (42)

白井啓治

『気が付けば月は昇っており静か』

太陽と星はこちらが意識しなくても己の存在は確りと主張しており、無意識にその存在を認識させられてしまう。ところが月は、こちらが意識しないとなかなか認識することが難しいほど、静かな主張しかしてこない。しかし、月明かりが雲に隠れてしまっていたり、夜更けまでなかなか出てこない月であつたりすると「暗い夜だな」と月の明かりがまるでサボってでもいるかのようなことを口にしてしまう。

「寝待の月」などと表現される夜も更けてから現れる月などには、寝待などという風雅な言葉とは裏腹に辺りの暗さを嘆く言葉が先ずは口について出てくる。ところが、暗さを嘆きながら空を見上げた途端「今夜の星は綺麗だな」と星に心を移してしまふ。また酷い時には夜空を見上げて星の瞬きが月明かりに邪魔されでもしていると思つたりする。月だと思つてしまつたりする。

古来より月を愛でるなどと風雅なことを言われている割には、現実には太陽や星ほどの存在感を持つて主張してこない気がするのへそ曲がりな私だけであろうか。しかし、だからこそ月に風雅

の表現が生まれてくるのだろう、とも思う。

さて、今月号から当「ふるさと風」にまた新しい風が一つ吹いてもらえそうである。この「ふるさと風」の会報がスタートした年の秋に、当会の兄妹として、聾女優の小林幸枝さんを座長とする朗読舞劇団「ことば座」を立ち上げ、ギター文化館を発信基地として『常世の国の恋物語百』への挑戦が始まつた。

ことば座がギター文化館を発信基地としたことで、ギター文化館の代表である木下明男さんから不定期ですが投稿を頂く事となりました。また、ことば座の関係でオカリナ奏者の野口さんご夫妻からも年に何度かの投稿をお願いしています。

また、この会報を応援していただいていた鈴木健さんからは、昨年春より継続した投稿を頂き、もう風の会の一員と会員一同、勝手に認識させていただいている。さらに「常世の歴史」を出している審書房の太田尚一さんからも時々投稿を頂いている。

本当に小さいけれど毎年確実に歩みを刻んでいる。そして今回から、美浦村の陸平をヨイショする会の皆様から投稿いただけるようになった。この陸平をヨイショする会の皆様とは、美浦村の市民劇団「宙の会」を通じてのお付き合いの始まり

であった。宙の会を主宰する市川紀行さんがヨイショの会の会長であったことから今年2月に陸平の文化財センターで行われた「縄文の森コンサート」へのことば座の出演で、当会との交流も急接近することとなり、当会からのラブコールでどうやらヨイショの会の皆様から会報への投稿実現の運びとなりそうである。

今月号には、6月のことば座公演で共演をお願いした、ヨイショの会の会員でミチオ・イト才門会で活躍されているモダンバレエの柏木久美子さんから原稿を頂いた。今回は(特別寄稿)の欄に紹介させていただくが、次回からは「ヨイショ談話室」といったコーナーを新設し、掲載していたら嬉しいなと思つている。

ふるさと風の会会員募集中!!

当ふるさと風の会では、「ふるさと風の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談・勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

折角なので「陸平をヨイショする会」について紹介しておこう。

『陸平をヨイショする会』（叩より引用）

この会は、陸平貝塚をヨイショする持ち上げる・大切にすることを目的に平成7年3月に結成されたボランティアグループです。地域の貴重な宝である陸平貝塚を広くみんなに知ってもらおうと、住民有志が荒藪だった遺跡の草刈りを行い、そこで学習会やイベントを開催したのが始まりです。

以来、月一回の草刈り定例活動をはじめ、さまざまな活動をおして、村のハンズ・オン陸平事業と連携しながら、陸平貝塚の保存と活用を進めています。中でも毎年、自然豊かな陸平貝塚を舞台に行われる縄文の森コンサートは人気のある事業です。

また部会として、縄文土器研究部会、縄文食研究部会、陸平縄文太鼓保存会、里山部会、縄文山がき隊があり、体験事業や里山復元など多彩な活動を行っています。

美浦村の市民劇団『宙の会』の市川紀行さんとの交流の始まりは、以前この会報にも書いたことがあったが、市川さん演出の「ゴッホとゴーギャン」の舞台を観に行ったことからであった。宙の会の素晴らしい所は、舞台を創る人もそうであるが観客として応援に来る村民の方々の文化に対する応援意識の高さであった。残念ながら文化力をもって自分たちのふる里を元気にしようという意識の高さは、この石岡にはない。

昨年の縄文祭りへは、当会の打田兄、菅原兄と一緒に出席してきたが、自分たちの手で出来る精

一杯の力で、昔、子供の頃に感じたワクワクするような手作りの素晴らしいお祭りに感激して帰ってきた。

今年6月に当会も6年目の活動に入った。小さくても自分たちの出来る精一杯の力でやってきたふる里自慢活動が、これまた小さくではあるが一步一歩前進し、広がりが出てきていることは大変うれしいことである。

ふるさと風の会、そして劇団「ことば座」として、今年嬉しい広がりが出てきた。大きなものではないが確実な一つ一つの広がりである事が嬉しい。

今個人的には、市川さん率いる劇団「宙の会」と「ことば座」の合同公演が実現できることを夢見ている。合同公演の出来そうな脚本を書いてみよう、先日打田兄に、下調べを依頼した。打田兄も、昨年「歴史の嘘」をテーマに千枚を超す長編にチャレンジしており、忙しいのであるが、夢は沢山持つことが大事とまた宿題を作ってしまった。

青屋 兼平ちえこ

当会報六〇号の「石岡雛巡り二〇一一」の文中での青屋神社について、水戸の富田様からお電話を頂いた。「旧暦六月二十一日に私共の地区では青屋箸で鯉鮓を食する風習がある」との事だった。

石岡には、青屋祭りという神事が行われた神社が二社あります。

高浜八六五に鎮座する、祭神を鹿島神宮と同じ

く武甕槌命とする高浜神社。そして総社一丁目四に鎮座する祭神を天照大神、ウガヤ草葺不合尊とする青屋神社（社殿として設けられたのは明治中期になってからで、それ以前は国府構内、後の府中城内に祭事毎の仮齋殿として）。

石岡に常陸国の国府が置かれた時代、石岡の国府に着任した国司は、常陸国一宮の鹿島神宮への参拝を国府の外港である高浜から船で鹿島神宮へ行く事になっていた。しかし、荒天の場合は高浜の渚にススキ、マコモ、ヨシ等の青草で青屋を造り、鹿島神宮を遙拝し、参拝に代えたという。これが青屋祭りの起りといわれている。

この遙拝の式典の終了後の直会（なおりい）に、青屋で使用したススキを箸として鯉鮓の会食をして無病息災、五穀豊穰を念じたとみられる。

富田様の青屋箸について、この青屋祭りでのススキの箸等に関して、歴史的な背景から語って頂けるのは、やはり、ふるさと風の会で歴史の生き字引きとして頼りにされている打田さん以外になく、お願いしたところ、即、「青屋神社（青屋祭）物語」と題して纏めていただき、それで富田様にお答えできました。

今回の会報に打田さんの「青屋神社（青屋祭）物語」が掲載されていますので皆様にも読んで頂いて歴史の醍醐味と来年こそ伝統ある高浜神社（七月二十五日）と青屋神社（七月二十一日）の祭礼をご覧ください。但し祭礼日は確認してからお出かけ下さい。

そして後日、富田様から「茨城の民俗」を購入したところ、その中に更科公護著「常陸の青屋祭について」の貴重な資料があるとの事で、それを届けて下さった。これは茨城県の青屋祭について

の調査記録であった。県内にこんなに多くの様な青屋祭がおこなわれていることに驚き、皆さんと一緒に古き良き伝統を訪ねてみたいと、お伝えしながら読んでいきたいと思えます。

茨城県の年中行事に青カヤの箸で鯉鮓を食べる行事がある。名称は、一般には青屋様または青屋箸とよばれているが、その土地によりオーヤの祇園、青屋祇園、新箸祇園、新箸の祝いなどともいわれている。日は旧暦の六月二十一日がほとんどだが、ごく一部旧の六月七日および十五日、それに特例として八月一日と言うのがある。

行事のいわれについてはすでにわからなくなっていて、天保年間（一八三〇～四三）に刊行された新編常陸国誌の年中行事の項に「青屋箸」というのが載っている。

更科公護著「常陸の青屋祭について」は次回といたします。

富田様には 沢山の資料や何回か足をお運びいただいたりして、お手数かけてしまいました。誠に有難うございました。

・香りのコーラス マリーゴールド ちきり

青屋神社（青屋祭）物語 打田昇三

鹿島神宮の創建年代は、神話・伝説による神武天皇時代と伝えられるから伊勢神宮よりも遙かに古く日本最古と言えらる。（香取神宮も同じ）鹿島神宮は中臣（なかとみ）氏の、香取神宮は物部（ものべ）氏の祖神であったと推定されるが、物部氏は蘇我氏

に滅ぼされたから、両社とも中臣系の藤原氏が崇拝したのである。特に藤原鎌足の鹿島出身説もあり、鹿島神宮は藤原氏の産土神（うぶすながみ）出生地の守護神として尊敬された。

中大兄皇子に協力して蘇我氏から政権を奪った藤原鎌足が死亡し、天智天皇（中大兄皇子）も重病となった西暦六七一年、天皇の後継を巡り弟の大海女皇子と皇太子の大友皇子とが対立して大海女皇子は近江宮（大津）を離脱し吉野入りをする。天智天皇逝去の翌年六月、大海女皇子は伊勢、美濃、河内などの兵を集めて都に向かった。この壬申の乱に大友皇子は敗れ、大海女皇子は天武天皇として即位した。このため天武系に協力した伊勢氏の氏神であった伊勢神宮が最高神になった。

藤原一族は敗者側に属して没落したが幼少のために助かった不比等の代に、ようやく朝廷内の地位を回復した。七一〇年は古事記や風土記完成の頃であるが、不比等は平城遷都に合わせて都に氏神を祀ることを思い立ち、鹿島神宮の武甕槌命、香取神宮の経津主命、それに河内（東大坂市）の枚岡（ひらおか）神社祭神二柱（天兒屋根命、比売神）を勧請したという。枚岡神社とは神武天皇が近畿地方へ侵攻する際に天種子命という家来に命じて二柱を祀ったとされる社である。天兒屋根命は神話の世界で天照大神が天岩戸に隠れた際に祝詞をあげて「出てきて！」とお願ひした神様であり、藤原氏を含む中臣（なかとみ）系の祖神である。天子種命は天兒屋根命と同一人物（神様）とする説もある。しかし、なぜ祀られたのがその地なのか？また比売神に当たる神様は大勢居るからどの女性か分からない。

昔の話なのでややこしいが、とにかく藤原一族

が平城遷都に合わせて遙々と武甕槌命を鹿島神宮から奈良に勧請した。その頃の日本には碌な馬が居なかった。奈良までは遠いので、鹿の背中に神様が乗って移動した。予備の鹿も連れていったと思われる。その時に、藤原氏は地元の民を集めて「ここに新しい神様を勧請してきたので何か供える物を持って来て、お供えしてからお前たちも頂いて良い」という命令を下した。言われた地元民は「自分で出せ！」と言いたいところを堪えて、家に戻り畑に栽培していた青物などを持ち寄って来た。中に気の利いた人が居て丁度、鯉鮓（うどん）を茹でていたので、それを箆に入れて持ってきた。参加者一同が神拝を済ませて、いざ、御相伴にあずかる際に、枝豆などは其の俣で食べられるが鯉鮓は素手という訳にいかない。すると誰かが「これで良い」と言って鎌で薄（すすき）の茎を切り、揃えて即席の箸を作った。それが旧暦の六月二十一日のことである。

以来、その日が初期の春日神社の御縁日となり「初青物を備え薄の箸で鯉鮓を食べる」ことが地元で祭祀行事化していた。なお、現在のような鯉鮓が普及したのは鎌倉時代以降のことらしいが、奈良時代には「索餅（むぎなわ、さくべい）」という名で縄のようにした乾燥麺を市で売っていたと伝えられるから「薄箸で鯉鮓」の話も有り得る。

ところが、その時代の奈良は、仏教界の力が増して桓武天皇はこれを避けるために平安遷都を考えるようになった程であるから、春日神社も次第に興福寺に呑み込まれてゆき、神事も廃れていったのである。何しろ、伊勢神宮まで一丈六尺の仏像が造られ、神宮内に「神宮寺」という寺を建てさせられた時代である。そこで藤原一族は称徳

天皇の神護慶雲二年(七六八)に春日神社を大改修して寺院から独立させ興福寺の鎮守とすることを考えた。実際よりは何十年も遅れたけれども、その年が春日神社の創建日となり、天皇皇后の行幸啓が増えて、春日神社は摂政関白家の氏神の地位を獲得した。仏教に干渉されないで済む。

一方で、いつの時代かは分からないが奈良の春日神社創建に関わり、地元の奈良近辺に広がっていた「薄箸で饅飩」の行事が逆輸入のような形で鹿島神宮に伝わった。現在は絶えたと思うが鹿島神宮には『旧暦の六月二十一日、祭神に薄の箸を備える神事』があり、これを「青屋箸の神事」と称し民衆もこれに倣って、この日は茄子、瓜、豆などの初物を食べる習慣があった。

春日神社から鹿島神宮へと伝わった神事に端を発する民族行事は、鹿島信仰とともに地元へ広がったけれども饅飩、蕎麦、ラーメンからスパゲッティに至るまで何時でも何処でも食べられるようになり、割箸も出回ってくる。行事が自然に廃れてゆくのは止むを得ない。「初青物を神に供え、薄の箸で饅飩を食べる」神から自然の恵みを分けて頂く」という、ごく自然な行為こそ人間の原点とも言える行事なのだが、ごく、近年まで、太陽暦の七月二十一日に「青箸の日」として行事が行われていたのは行方郡と新治郡だと、昭和三十年代に発行された年中行事の辞典は記録している。

多分、この名残だと思われるが長野県(北安曇地方、新潟県 頸城地方、諏訪大社の行事などにも「青箸」に関わる行事があったようで、同じ系統の神事と考えられている。古来、青色は邪気を払うという中国の思想が伝わったらしく宮中行事に「あおうまのせちえ」があった。日本では白馬のほう

が神聖視されていたので、文字では「白馬の節会」と書く。大切な正月行事であった。

青屋神事に似たような行事に「名(夏)越の祓い(なごしのはらい)」というのがある。本来は大坂の住吉神社で行われる「夏越」で旧暦六月末に社頭の「茅の輪くぐり」で参拝者がお祓いをする。地方によっては、この日を休日にしたり、牛馬を海水を浴びさせたり、小麦粉で饅頭を作ったりするらしい。水の神、田の神に感謝する行事らしいから「青屋の神事」と根は同じなのかも知れない。他にも石川県七尾の「青柏祭」、和歌山県南部で行われる田祭りの一種「青祈禱」など、いずれも、饅飩ではないが小麦粉の餅や饅頭が作られる。

「石岡市史」では現存する総社宮、青屋神社、高浜神社との関係から、常陸国司(淳名天皇の天長三年からは常陸介)の鹿島神宮参拝に伴う遥拝所としての青屋神事(後代に大掾氏が継承した)を主に記録しており「石岡の地誌」にも、青屋祭に京都から勅使が来たり、大掾氏が勅使の代理を務めた記録が収録されているが、行事の本来は素朴な民間信仰であり権威をひけらかした役人の行事ではない。高浜大明神(高浜神社か?)由来にも「神体は天児屋根尊之大祖大織冠内大臣鎌足公之御先祖」としてあるから、青屋祭の原点は藤原氏の氏神である春日神社神事に由来することは明らかである。民衆に押しつけた祭祀を公家や豪族が横取りしてはいけない。

石岡の青屋神社祭神は天照大神、彦波瀲鷲草葺不合尊(ひこなきさたけうがやふきあえずのみこと)、武甕槌命の三神となっている。鹿島神宮から春日神社へ遷られた際の祭神は、当然だが武甕槌命一神であり、神事が春日から鹿島へ逆輸入された際に、

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

- 9月4日(日)大萩康司 ギター・リサイタル
- 9月11日(日)里山と風の音コンサート
- 9月18日(日)チャン・ディンゴ ギター・リサイタル
- 10月2日(日)長谷川きよしコンサート
- 10月9日(日)小川由美子 & SONOROSA ジョイントコンサート
- 10月23日(日)小原聖子モデルコンサート & マスタークラス・ワンレッスン
- 10月29日(日)フラヴィオ・クッキ ギター・リサイタル
- 11月3日(日)ジオルジュ・ミルト & 宮下祥子コンサート
- 11月5日(日)福田進一ギター・リサイタル
- 11月23日(水)アンドレイ・パルフィノヴィッチ・ギター・リサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で

紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、
また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、
自分の風の声を「ふるさとの風景」に
唄ってみませんか。
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味
をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

知り合いだつた天照大神が同伴してきたものと思像できる。問題は「彦波瀲鷗草葺不合尊」で、この神様は神武天皇の父親とされる人物？であり、生まれる際に母親の豊玉毘売命(よたまびめのみこと)海の神の娘が、自分の国の風習に従つて浜辺で産産をした(海亀?)と鶴の羽を集めたり浜辺の青萱などを刈つて産産を作つた。それが完成しないうちに産気づいて未完成の小屋で産産した。そこで子供に「うがや・ふきあえず」と名付けた—その神話と青屋とが合致するので、誰かが思い付いて「安産の神」として合祀したものと考えられる。どういう理由かは知らないが、鹿島神宮は「安産の神」としても営業していたと言われるから、この発想は正解であつた。ただ石岡の人は是を知らないから他の病院へ行つてしまふ。

「ふるさと“風”の会」の兼平智恵子さんが水戸市小吹町在住の方から「地元にも青屋の行事として青箸で鰻鮓を食べる風習がある」と伺い石岡の青屋神社との関係を感じておられたが、端的に言えば「全く同じ行事」だと言える。なぜならば、水戸市小吹町辺りは室町時代中期頃まで府中(石岡)城主・大掾氏の領地であつたから、行事が其の俣に伝わつたものと推測できるからである。大掾氏は鎌倉時代に本流が没落し、水戸近辺にいた支流・吉田氏系の馬場氏が源頼朝の命令で本流を継承し大掾氏を称した。

南北朝時代の末期に起こつた上杉禅秀の乱や難台山の合戦などで、その対応を誤つた府中城主・大掾氏は先ず府中から水戸まで有つた領地のうち河和田、赤尾関、鯉淵などの領地を失つた。次に水戸城を失い、僅かに府中城にしがみ付く弱小勢力になつて天正十八年、豊臣秀吉から常陸国内討

伐の全権を任された佐竹氏に滅ぼされる。

鎌倉から水戸城没収を(江戸氏に渡すように)言われながら、これを占領し続けた大掾満幹が應永三十三年(一四三六)六月二十一日の青屋神社祭祀に参加するため、水戸城を留守にして府中城へ来た。青箸で鰻鮓を食べている隙に水戸城の正式所有者である江戸道房に城を奪われた。鰻鮓一杯が城一つとは余程、物価高の時代であつたらしいが水戸城は本来の所有者に渡つたことになる。

此の事件で青屋神社が一躍、有名になつたのであるが水戸市小吹町の青屋行事に補足すると、小吹町は河和田に近い。江戸氏に取られる—鎌倉の命令で所有権が移る前の河和田城には大掾の重臣・河和田入道が居て近辺を抑えていたから、領内と思われる小吹地区には府中の行事が伝わつていても何ら不自然ではない。

それにしても、豪族が地元の民族行事に箔をつけて自分たちの権威保持に利用するなど神様にしてみれば迷惑なことで、お叱りを受けるのも当然かと思われ。有り合わせの青物と最高の御馳走の鰻鮓で鹿島の神様を御迎えした奈良の人たちの誠実さこそ武甕槌命が一番嬉しかったと思う。

大掾氏の没落は青屋神社の罪では無いが、せめて地元の人だけでも祭祀の本来の意味を伝えていつて欲しいものである。(暴言多謝)

想定外

鈴木 健

本誌61号に、このたびの『未曾有の複合災害』に対する菅原先輩の総括が載りました。納得のゆ

く論調で、共感を深めました。特に貞観地震について関心を持っておりましたので、僭越ですが、蛇足をつけさせていただけようと思います。

日本書紀、続日本紀のあと、日本後記・続日本後記・日本文徳天皇実録・日本三代実録と、時代を追つて平安時代前期までに作られた六つの公式歴史書を六国史という。最後の日本三代実録は清和・陽成・光孝天皇の三代、在位八五八〜八八七年の歴史。そのなかに貞観(じょうがん)一一年五月二六日(八六九年七月一三日)に三陸沖を震源として起きた貞観地震の記録がある。地震で「城郭倉庫、門櫓障壁の崩れ覆るもの、その数を知らず」、津波は「たちまち城下(陸奥国府)に至る」。詳細は菅原論文のとおり。

それに関して、3/27毎日新聞には『**大津波再来**』の指摘監視』と見出しの記事が載つた。それによると、二〇〇九年の経済産業省の審議会で、委員の岡村信行・産業技術総合研究所活断層・地震研究センター長は、マグニチュード8以上と見られる**貞観地震**再来の可能性を指摘したが、東電側はとりあわなかつたという。そのあとでのこの災害。センター長は「原発であればどんなリスクも当然考慮すべきだ。あれほど指摘したが、東電からは**新たな調査結果**は出てこなかつた。『想定外』とするのは言い訳に過ぎない。」と切り。

ところが東電の調査結果が新たにでてきた。5/23朝日新聞はそれを次のように伝えている。「東電は、二〇〇九年から一〇年にかけて、福島県内の5地点で貞観の大津波で運ばれた砂を調べた。この結果、南相馬市で高さ3以上の地点に砂が

あったが、4 位の地点では見つけられなかったとして、津波が海岸に駆け上がった高さは『最大で4 位未満』と結論づけた。富岡町からいわき市にかけては津波で運ばれた砂は見つからず、『標高4 5メートルを超える津波はなかった可能性が高い』とした。『福島第一原発で東電が想定していた津波の高さは5・7メートル。東電による貞観の大津波の調査結果は、(※この) 想定を追認する内容だった。』

これは過去の津波を小さく想定することで、今回の津波を想定外の大きさにし、責任のがれの口実とするものではなからうか。「こうして事故は想定外で起きたのではなく、想定を受け入れなかったことで起きた。起きるべくして起きた人災であったことは明らかだ。しかも、東電が危険の想定をあえて意識的に無視してきたことの背景が、『大規模工事になりカネがかかる』(4/6朝日) という見出しの記事からも分かる。」『マスコミ市民』5月)

では、現実には第一原発を襲った津波はどのくらいの高さだったのか。それについて、5/20朝日は、『東電発表値、周辺で突出』として、次の数値を图示している。津波の高さ(浸水高。単位はm) 北から、陸前高田市 5.5、女川町立病院 17.6、名取市関上 9、相馬市磯部 6.8、福島第一原発・第二原発 14.5、いわき市豊間海岸 6.2、北茨城市大津 5.1、日立市河原子 5.1、大洗町 4.8、旭市下永井 (原発の浸水高は東電の発表、他は東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループの資料から作製)。震源に近く、湾奥に位置する陸前高田市や女川町が高いのは当然であるが、遠く平坦海岸に立地する第一・第二原発が東電発表ではそれと同値で、周辺に比べて突出している。そのことを同紙も「東電の発表した津波の高さは

周囲に比べて突出していることも謎を深めている。海底や海岸の地形で局所的に津波が高くなることはあるが、『周辺と比べて津波が特に高くなる理由はなさそう』(東北大学木村文彦教授) だからだ。」と書く。では、東電が14.5とするとする根拠はなにか。同紙は1面で、『津波一気 原発水没 東電写真公開』として3枚の写真を載せ、さらに2面でも、『原発津波 本当の高さは』という4段抜きの大見出しのもと、1面と同じ写真も使い、『防波堤わずかに超える? 専門家』10級、『建屋付近 浸水の跡から 東電』14.5と『問題点を指摘していた。詳しく見てみよう。』

1面の写真には以下の説明が付く。「4号機の原子炉建屋近くにある集中廃棄物処理施設の4階から撮影した。津波が押し寄せ、高さ5メートルほどのタンクが水没していく様子を克明に写していた。□(□の1分後)。水が引いた後は、壁の一部がはぎ取られ、押し流されてきた車が立って残っていた。□(さらに1分後)。処理施設は海面から10メートル地点と、原発の敷地のなかでも高いところにある。しかし水が入り始め、わずか1分ほどでタンクが水没するほど水位は急上昇した。」津波一気 原発水没 という見出しをインプリントされた読者は、この連続写真と説明に目を移す。そこで「敷地のなかでも高いところにある」「処理施設」は原子炉本体であり、そこに「水が入り始めた」と誤解する。大津波により、高いところにある原発本体が一気に水没したと思ひ込むように仕組まれているのだ。だがそれは、本体ではなく、防波堤外の付属施設のことであった。

2面の写真では、まず「10級の防波堤を超えた」とのコメント付きの写真がある①。それを見

た限りでは、右端は波を透かして堤防が見える程度にそれを越えているが、そこから中央にかけては越えてはいない。しかも外側の海の高さはかなり下で、白濁は堤防に衝突したあとの帰り波であろう。左半分は白い波がかぶさっているが、堤防が隠れることなく見通せるので、主体は波ではなく。波しぶきであるように見える。全体の印象としては、さほど高くない津波が、防波堤に衝突した瞬間をとらえたものである。この写真をもつて「10級の防波堤を超えた」とするのは無責任である。ただし、何波目かには防波堤を乗り越えて上陸したことも想像に難くないが、それが1/4号機建屋に進入した証拠は示されない。

手元の3/30空撮写真をみると、まず、外堤、内堤ともテトラを含めて健全である。海岸の低地には散乱物があり、低階建物も破損したかもしれないが、これらは津波の被害であろう。上手のタワー建屋の屋上や近くの散乱物は水素爆発によるものである。タワー建屋の海側に並行する道路には教台の大型・小型車が見えるが、いずれも、左路側に沿って引きずられた形跡はない。あるいは、津波によってタワー建屋内にあった非常用ディーゼル発電機が水没して使えなくなり、原子炉冷却機能喪失の重大事態に陥ったと発表するが、立ち入り禁止で分かるはずはない。非常用電源のための燃料貯蔵タンク流出、電源一切なし。冷却ポンプ冷却不能というが、オイルタンク流失後の見取り図とか写真は公表されない。大津波の直撃ですべての電源が喪失し、冷却不能に。テレビは、ただこれを繰り返すのみ。

そしてもう1枚、1面の□と同じ写真を使い、「別の場所では海面から15メートル(地上から5メートル)の高

さまで水につかった」との説明をつけ②、建屋の中間に青の横線を引いて「通常の海面から約15㍎」とコメントし、つぎの解説が続く。

「津波は高さ10㍎の防波堤を乗り越え①、海面から高さ15㍎まで水流が押し寄せてタンクを水没させていた」。これはウソ。タンクは防波堤外であることは、引き続き次の解説で明らか。「南端にある集中廃棄物処理施設付近では、軽油タンク（高さ4・3メートル）や重油タンク（高さ5・5㍎）に水がせまり、1分後には見えなくなる。さらに1分後に水が引くと、乗用車が壁に直立していた。付近に防波堤はないものの、1㍎4号機の原子炉建屋と同じ標高10㍎の地盤にある。東電は建物の壁などを調査し、1㍎4号機の海側の壁などで地上から4㍎5㍎の高さまで水につかった跡②を確認。想定していた5・7㍎にたいして、14㍎15㍎の津波だったとして、『設計で考えた大きさ』を3倍近く超えた」（武藤栄副社長）と高さを強調してきた。東電は今回の写真でも14㍎15㍎の高さが裏付けられたとしている。しかし、ここにもウソがある。

現地は4基の原子炉を二重に囲む防波堤の側壁延長線に近い外側にある。ということはおもつとも波高が高まる場所である。近くの放水口付近のテトラが唯一崩壊している。しかも、現場は建物の裏側（山側）。そこでの現象を「1㍎4号機の海側の壁などで地上から4㍎5㍎の高さまで水につかった跡②を確認」とするのは欺瞞である。②は防波堤外の付属施設である。しかも、5・5メートルのタンクより、水深5㍎（海面から15㍎）の横線の方がはるかに高いのはなぜか。1㍎4号機の津波高は上記のように標高10メートル前後、地盤す

れず。防波堤外の現場の方はそれに何㍎か上積み。加えて、津波本体であれば増水が1分間でほぼ復元すること③はありえない。それに、ピーク時にも怒涛が押し寄せた気配はなく、側面から中庭への流れ込みで比較のおだやかに水かさが上がる様子④である。そこからの推論であるが、後押しされた津波がコの字型の現場の空き地に回りこみ、水かさを増した。あるいは、さらに先まで駆け上がった波が引き、袋状の空き地に停留したか、ではなからうか。付け加えると、1㍎4号機から少し離れて5、6号機があり、こちらの防波堤は一重なので津波は進出した。正直に「5号機の重油タンクに津波が迫る。高さ10㍎の防波堤は破壊され、水が引いたときには、タンクの側面が津波の衝撃でねじれるように凹んでいた」とする週刊誌もあるが、同じ写真を使い、「津波が福島第一原発に押し寄せた瞬間。津波は高さ10㍎の防潮堤を軽々と乗り越えた」としたり、5、6号機のタービン建屋の側面を洗う写真を使い、「大津波によって、福島第一原発も壊滅的な被害を受けた」とするすり替えも行われている。いずれにしても、東電の今回の津波に対する過大視は、過去の津波の過小視と相まつての責任逃れの口実である可能性が高いが、さらに、東電側の駄目押しが国民の前に示された。

5/31朝日に、『津波高さ40・5㍎まで 宮古研究者チーム分析』との3段抜き大見出し

で、今回の津波自体が想定外の大津波であることをアピールする記事が表れた。それによると、「東日本大震災の津波は岩手県宮古市で海面（平均海面）から40・5㍎の高さにまで到着していたと、全国の研究者でつくる全国津波合同

調査チームが分析し、事務局を務める京都大防災研究所の森信人准教授が三〇日、土木学会関西支部の報告会で発表した。森准教授によると、調査チームは東京大、東北大、名古屋大、徳島大など全国の大学や建設会社などの48研究組織の147人からなる。大震災翌日から数人一組となり、全国約3600カ所で、津波の到達範囲と高さを調べた。このうち、もつとも津波が高くまで来ていたのが、宮古市重茂姉地区だった。海岸から約520㍎離れた斜面の樹木に、津波で流された枝などがひっかかっていた高さが、海面から40・5㍎に達していた。およそ10階建ビルの高さに相当する。湾の中にあり、津波の高さが増幅されたとみられるという。一方、宮城県では海岸から約11㍎内陸で、津波の痕跡が確認されたという。建設会社も入った土木学会での発表である。樹木にぶらさがったのは、津波に流されてひっかかったのか、津波に跳ね飛ばされたのかわからない。11㍎まで駆け上がった場所は不明。肝心の福島のことには書かれない。しかし、多くの読者はそのようなことは考えず、大見出しだけで第一原発の津波も想定外であると思っただけではなかったか。大津波の直撃ですべて電源喪失、冷却不能。副社長は「結果責任は負う」と言う。原因は津波にある。津波が悪い。東電は悪くない。5/25朝日は1面トップで『冷却配管 地震で破壊か』、2面で『原発耐震 検証が必要』の大見出しのもと、ともに8段にわたる記事を書いた。「原子力界からは、今回の原発事故は津波のせいだ、『M9の地震にも耐えた』と原発を擁護する声がある。だが、「想定外の津波だけで

なく、揺れにたいしても万全でなかったとしたら、他原発の安全対策や指針の見直しにはつながらず、影響は大きい。」ということである。私たちの危惧もまさに同じ。一切の原因・責任を津波に押し付けて葬り去ろうとするスケープゴート屋には反省や対策が期待できない。このままでは、また同じ災害が起こりうるのだ。

『想定外』を想定せよ！

菅原茂美

前月号では、原発建築に当たり、甘い見通しが『想定外』の悲劇を生む…と指摘した。

それでは何がどれくらい甘かったか？

その第一は、全世界でもマグニチュード(M)9クラスの巨大地震は、100年に数回しか起きないのに、それが当地で、近年に起きるわけがない…としたこと。しかし、過去を調べると、東北の太平洋沿岸には、貞観地震、明治三陸地震など、巨大地震は繰り返されていた。今回の地震では、福島第一原発へ電力を導入する鉄骨の電柱は、大きな揺れで倒れ、断線して冷却ポンプへ外部電力を供給できなかった。巨大事業を起こすのなら、当然過去の歴史を綿密に調べ、超巨大地震の発生を想定すべきであった。

第二は、津波の高さの認識の甘さである。最大でも5・7メートルと見ていたが、実際は15メートルの津波に襲われた。そのため、原発を冷却する諸機能が失われ、水素爆発を起こし、大量に放射線をまき散らし、レベル7の最悪の事態となった。過去にも当地は、巨大津波に何度も襲われているのだから、こんな予見ができないはずはない。利益追求のため、頑丈で高さのある防潮堤建設をケチるなど、必要経費を削減した結果と言える。

第三は、外部電力が導入できなくなることを想定して、非常用ディーゼル発電機による電力確保を用意してはいたが、それが津波により、機能できなかったことである。緊急用の発電機なら、どんな悪条件でも機能する構造が要求されるはずなのに、それが甘い判断のため機能しなかった。形式だけの対応なら、あまりにも誠実感に欠ける。

第四は、冷却水として、第一原発から南西方向10kmの所にある坂下ダムから、真水を取水していたが、これも強大地震により破壊され、急遽海水に頼らざるを得なくなった。内部冷却に海水を使えば、原子炉の復活が危うくなるため、海水導入をためらった結果が、高温・高圧を招き爆発に至った。

そして第五は新聞報道によると、現地の所長は現場を知り尽くしている。しかし、本社や政府が、海水導入やベントガス抜きに一々口出しを行い、現場のスピード解決を鈍らせた。その分、放射線の漏出が増大した。幾重にも重なったヒューマンエラーであった。

このような不誠実が幾重にも重なり、事故の規模を拡大し、住民に多大な苦痛を与えた。

そして挙句の果てには、総理は閣議了承もなく、思いつきで、脱原発論をブチあげた。日本が全ての原発を凍結したなら、たちまち74万人の雇用喪失、経済成長率を年1・4%引き下げることになり、産業の空洞化を招く。ドイツ・スイス・イタリアのように、隣国から電力を簡単に輸入できる状態とは全く違う。節電ぐらいで我が国の産業

を維持・活性化できる状況ではない。総理は復興の財源をどこに求めるつもりなのか？ 企業を活性化する以外に方法はなからう。綺麗ごとでは、天下国家は収まらない。仮初にも、総理の口から軽々飛び出す言葉ではない。

結局、今度の福島原発事故は、政府が当初、レベル5とした軽微なものではなく、惨憺たるものであった。善良なる住民は、企業の怠慢な経営体質により、悲惨な目に合わされた。

その結果、多くの人々が、生命の危険に曝され、住みなれた故郷を後に、強制移住させられた。その数5万3千世帯、16万人。いつ戻れるかの見通しも、全く闇の中。先祖代々の土地やお墓はどうしてくれる？ これでは独裁国家が国の思惑で、住民に有無を言わず強制移住させるやり方と、結果的に何ら違いがない。地域の基盤をなす雇用の喪失。大黒柱が職を失い路頭に迷う。見知らぬ土地への学童の転校や進学生をかかえて、途方にくれる。高齢者や身障者の介護の問題。生活基盤の農地や家畜も失う。役場さえそこには無い。そして商店など、長年培った客との信頼関係等、全て水泡と化した。更に隣近所、顔見知りバラバラ。こんなバカなことが、なぜ引き起こされたか？

結論からいえば、原発を建設した当事者の『正義感の欠如・コストを値切った営利の追求』この一言に尽きよう。事業主体の東電は、国策として原発推進の強力なバックアップがある。完璧なお墨付きがある。たとえ何事かあっても、最後は国が面倒見てくれる。そのためにも主管官庁から、強力な官僚OBが多数天下っている。海外輸出実績のある原発メーカーからの強力な働きかけもある。(更に国が選んだお抱えの)学者などの安全宣言の後

押しもある。国策・推進派多数・肩書きのある著名な学者、これら強力な後押しがあれば、少々なことは目をつぶってゴーサインだ。そして地元自治体に対しても、『安全性の過大評価・リスクの過少評価』を徹底。札幌で誘惑をする。

国は国で、指導監督はしているが、事業主体はあくまでも民間企業の東電である。事故があれば、東電の資産で賠償すればよい。地球温暖化防止のため、先代総理が国際会議でCO₂削減の大見栄を切った（1990年比で、2020年までに、CO₂5%削減。そのためにも全発電量に対する原発による発電量の割合を、現状の29%から、50%にまで引き上げる必要がある。フランスやアメリカも原発に重心を置いている。そして、権益にしがみつく、原発「族議員」も、共にスクラムを組んで後押しをしてきている。

一体、事業推進に当たり、地元住民を真っ先に考えた人はいなかったのか？ 最後の責任者は、誰なのか？ 記者会見などでは皆、責任逃れのシドロモドロの答弁。もたれ合いの寄せ合い所帯。国家にしる会社にしる、指導体制が、ワンマンによる独裁では、いろいろ問題も多いが、もたれ合いの集団指導体制で、どこに焦点があるのか、全く見当もつかない。客観的に安全性を審査すべき「保安院」は事もあるうに、原発推進官庁の内部機構である。世界からどれほど改善を要求されても、未だに知らんふり。言わば、みんな「グル」なのだ。これでは、強制移住させられた住民が、浮かばれない。長年住み慣れた「ふるさと」を、理不尽な強制力で失うなど、断じて許されるものではない。

【今回の福島原発事故を受け、IAEA（国際

原子力機関）は、加盟各国に対し、全原発に対し、「ストレステスト（耐性検査）」の実施を求め方針だという。ストレステストとは、従来の安全基準を超える強大地震など、厳しい条件に曝された場合の影響を、模擬計算し、電源・ポンプ・配管など弱点を洗い出し、それに耐えうるかの確認を取ることでだという。首相は閣内の統一協議を経ないで、このテストに飛びつき、数カ月かけて我国でも、このテストを行うのだという。そして更にまたも閣内協議抜きで、「脱原発」を打ち出した。将来の日本のエネルギー政策をどうするかの基本裏付けも何も無い。消えゆく灯火の最後の足掻きのようなもの。振り回される国民がいい迷惑だ。

（実は私も現役中、動物用ワクチンの製造承認に関与した。ワクチン使用説明書には、ワクチンは冷暗所保存となつていますが、実際の使用現場では、野外牧場を駆け回りながら注射するなど、人間のクリニック内などとは想像もつかない過酷な条件で使用される。そのため、ワクチンは製造段階で、すでに「残酷テスト」が行われ、37℃放置でも効果を減じないことが義務付けられている。獣医学では『想定外』を常に「想定」している。）

* * * * *

さて、地震と津波だけだったら、今回の震災は、自然災害として、大変ではあるが、その復旧・復興に全力を尽くす覚悟が生まれよう。自然が相手では怒りのブツケようもない。ここは新たな決意と頑張りで、国内外の強力な支援も頂き、皆で力を合わせ、立ち上がろうとする。

【全国からの義援金は総額2947億円に達したが、4か月経っているのに、被災者の手元に届いたのはそのわずか2割に過ぎないという。これ

では、後発支援予定者の意欲もそれがよう。】それが後々までも生命を脅かす放射能汚染によるヒューマンエラーと来ては、全く目も当てられない。国策だか何だか知らないが、会社の利益追求のために、安全投資が省かれる。住民の生存権など、眼中にない。我々が供給する豊富な電力により、日本は今日の繁栄を見ているではないか：という奢りがあつたに違いない。

故郷の土壌が汚染し、子々孫々にまで影響を及ぼし、真綿で首を絞めつける、こんな残酷な放射能汚染は、設計段階から、絶対に避けるべく十分検討されているべきであった。そしてスリーマイル島やチェルノブイリなど、いやというほど辛酸をなめている。国内でも放射能漏れで廃船となつた原子力船「むつ」もあり、柏崎原発の火災や、東海村の臨界事故など多くの経験があつた。にもかかわらず、それらの経験が、十分に生かされていない。技術立国の日本がこの体では、あまりにも情けない。こんな甘い見通しの『想定外』は、絶対にあつてはならないことだ。全て「想定内」に置くべきであった。これでは人命重視の根本理念に欠けると非難されても仕方あるまい。近視眼的な利益追求の意思決定は、国民を愚弄するものであり、重大な犯罪にも相当する。『正義感』の欠落と非難されても仕方あるまい。

事業が巨大であればある程、もしトラブルが起きたとき、周囲に及ぼす影響は甚だ大きい。会社は利益の追求が基本であろうが、想定を超える事故発生のため、多くの住民に生命の危険を及ぼすなどは、もつてのほかである。常に真摯な正義感が貫かれていなければ企業は信を失う。

強大な国家を築くため、多少の人民の犠牲はや

むを得ない…とする前近代的な考えは、断じて許してはいけない。そういう考えは、今日、中東などで多くみられるように、後日、必ず反政府運動として跳ね返ってくることは明白である。

* * * * *

さて『鉄は国家なり』と言われたこともあったが、『電力は国家なり』と言い換えても良からう。電力なくして、どんな産業も成り立たない。国内54機の原因は今、殆どが検査などのため、休止中である。今、日本は全電力の29%を原発に頼っている。それが再稼働不能となったら、他の発電機をフル稼働しても、到底間に合うはずもない。やむなく15%の節電が義務づけられているが、これでは我が国の経済発展に重い影が漂う。悲しいかなすでに「節電熱中症」のため、多数の老人等が死亡している。そしてすでに多くの企業が、先を見越して海外移転を検討中で、いずれ日本の製造業など空洞化して雇用喪失。多くの労働者が路頭に迷うことになる。

ならばどうするか？ 化石燃料をドンドン燃やして、不足電力を賄う？ そんなことは、地球温暖化防止の理念に反する。日本が世界に発信した温室効果ガス削減の模範解答を裏切ることになる。海抜ゼロメートル地帯は、たちまち水没だ。地下街も地下鉄も、まずお手上げ。東京・大阪・名古屋など、水浸しの状況を想像できますか？

そんなことは例え有ったにしても、どうせオレ達が残った後だ。知るもんか！ というような政治家なら、サッサと永田町を去ってもらいたい。

それどころか、温暖化が進めば、熱帯の強烈な伝染病が、中緯度地帯で、大流行は間違いない。日本でもマラリアが大流行し、毎年何万人も死亡

することは明らか。今、世界中でマラリア感染者数は2億人、毎年2百万人が死亡している。その上、熱帯の毒虫・毒ヘビが、都会のど真ん中で、ウヨウヨ。そんなの、耐えられますか？

今、原発反対の氣勢が世界各国で強烈だが、ならば、不足する電力を何で賄うのか？ 明確な答えを用意しなければ、成熟した大人の言動とは言えない。対案なしの反対運動は、児童に等しい。明確な責任ある対案を明示しないことには、説得力がない。これまで、日本で原発差し止めの訴訟は16件あり、15件は、冷却用電源が同時に喪失する可能性はあり得ないとして、全て原告敗訴であったという。しかし、志賀原発の裁判では、世の中には、こんな偉い裁判官もいるのかと驚いたが『どんな想定外の事態が起きないとも限らない』として、原告の訴えを認めたという。こんな判決例が、福島原発で、考慮されていたなら、この度の悲劇は避けられたかも知れない。原発に、乗っ取った飛行機で自爆テロ？ 欧米各国は今、それを一番警戒している。

私とて、不測の事態でどんな災害をもたらすかしない原発に、何も、もろ手を挙げて賛成というわけではない。そんなモノないに越したことはない。しかし、日本は資源小国なので、海外から、資源を輸入して加工し、物造りに徹し、製品を海外に輸出して今日まで生きてきた。その物作りの原動力が電力だ。その電力が国内の需要を満たせないと来ては、産業の空洞化、即ち国家は衰退の坂道を下るだけであろう。

ここは一念発起。節約すべきは節約し、太陽光・風力・水力・地熱など自然エネルギーをフル活用し、更に埋蔵量も多く、CO₂排出の少ないLNG

(液化天然ガス) による火力発電強化、そして、微生物の発酵エネルギーを電力に変え、その上で、化石燃料を効率的に燃やし発電する。そして発電した電力は、銅の送電線では5%もロスがある。それをコストは高いが、電気抵抗の少ない超伝導のケーブルなどに置きかえられれば、ロスは1%ぐらいいで済むという。それでも不足な分は、厳重な管理の下に、原発に頼る。叡智を絞って安全・有効な発電・送電を確保すべきである。

【いつも思うのであるが、そもそも東京一極集中など、過度に人口集中するから、巨大な電力を浪費する。山手線など2〜3分ごとに列車が発車する超過密ダイヤだ(山手線は自家発電で走っていると言いが)。人口分散を図れば、過密ダイヤは解消され、安全快適な運行が約束されるはず。

日本は政治も経済も、教育も芸術も、何もかも一極集中という無策を許してきた。国家建設にそのもその間違いがあった。火山噴火や地震・津波の他、人災としての今回のような原発事故など、首都を襲う事故が発生したら、正にアウト。

このたびの東日本大震災では、東京は震度5であったが、帰宅困難者数は、三百万人と言われた。大停電の恐怖は想像を絶する。老いた親と幼子を持つあるOLは、都心からハイヒールで神奈川までの30kmを、8時間かけて徒歩帰宅したという。歩行者が車道に溢れ車は渋滞。救急車もタクシールも全く走れない。そしてこの際の歩行者は「被害者」とも言われた。このような事態を防ぐためにも、首都機能は地方に移転すべきである。欲張って一極に集中することは、巨大なリスクを伴う。】

* * * * *

さて、人生は殆ど『想定外』のリスクだらけ。

最大はなんと言っても、突如最愛の人を失うことだろう。伴侶・家族・親友など、思いもよらぬ病气や事故で失った悲しみは、筆舌に尽くし難い。不可抗力ならともかく、強権や人為ミスによる理不尽な犠牲など、決して許されるものではない。リーマンショック・円高株安・低金利・中国によるレアアースの輸出制限等みな『想定外』である。

私自身も振り返ってみると、高校2年の時「肺結核」で1年留年。抗生物質のない昭和20年代後半の出来事。幸い畜産農家であった我が家では、あの超食糧難の時代に、鶏卵・牛乳・バター・チーズは豊富にあった。豊かな栄養のおかげで、命は助かった。留年など多感な少年には、ショックが大き過ぎたが、今考えてみると、あの時の読書習慣や、囲碁・将棋の基礎勉強が、今日の私の趣味面など、人生を豊かにしてくれている。「想定外」の病気も、必ずしもマイナスばかりではない。

ついでだが私は64歳の時、前立腺癌手術のため、筑波大学付属病院に3か月半入院した。背中にモルヒネのチューブを背負っており、何の苦痛もない。経過は極めて良好。待合室にあった碁盤で、毎日、石を並べていたら、同じ入院患者等が多数寄ってきて、和気あいあいの中で、毎日碁打ち。こんな楽しい毎日なら退院などしたくない。天が授けてくれた「癌」に感謝感激。

ついでで。手術の後、局部を放射線治療。周辺リンパ腺などに、癌細胞が残っている可能性があるから。治癒後、直腸粘膜を内視鏡で見せてもらったが、被爆ケロイドが酷い。更にX線検査・CT検査など大量の放射線を浴び続けたが、術後11年過ぎてても私は意外と元氣。勿論放射線は怖いものであり、免疫力に個体差はあるが、人

は放射線により破壊されたDNAや細胞は、かなりの確率で自ら修復する能力を持っている。人も動物も、自然界に存在する放射線に毎日曝されているが、傷ついた細胞は、意外と速く修復されるものである。生き物は全て、自らの力で、大方は修復する能力を持っている。

メロンの網目模様は、表皮よりも内部果肉の成長が速すぎるため、表皮にヒビ割れができ、それを修復した跡が、あの網目模様なのである。

今、放射線の有害性について毎日マスコミなど騒々しいが、幼いわが子を思う親心は分かるが、そのために偏った栄養摂取が行われたりなどしたら、その方がかえった危険である。科学者の解説も「絶対」という言葉は使えないので、何かしらアヤフヤで、要領を得ないと思うかもしれないが、大方は許容範囲と言われるものは、それを信じるほかはないであろう。強力な放射線は勿論危険であるが、微弱なものまで神経質になり、「ゼロ」でなければ納得しないのは、自分を苦しめるだけである。生き物の適応能力を信じることだ。

さて、今後人類を襲う可能性のある『想定外』の厄病神には、どんなものがあるだろうか？

日本においては、地震では東海・東南海・南海の三連動地震発生。個々の発生なら津波の高さは5〜6メートルらしいが、連動発生すると15メートルになるらしい。そして貞観時代、巨大地震と合わせ、富士山、阿蘇山、鳥海山などが連続して噴火した。こんなことが短期間に連発しようものなら、どんな内閣でも、お手上げ。国家壊滅だ。しかし、これらは過去の例からも起こりうることなので、『想定外』として放置することなく「想定内」に

置くべきことである。

更に地球上の海底には、メタンハイドレートが凍結状態で張り付いている。それがもし、海底火山の噴火により、溶解・気化して大気中に噴出すれば、莫大な温室効果ガスとなり、地球は急激に温暖化する。これは真に恐ろしい話であるが、起こりえない話ではない。カンブリア紀以来過去5億年間に、全生物の90%が酸欠などで絶滅した事件は5回も起きている。無秩序な人間活動で、その6回目を起こさないことが肝心である。

そして人類が滅亡するとすれば、物質文明の過剰な発展により、自然環境の破壊汚染が進む。今日のように無秩序な繁殖で人口過剰が進めば、当然資源枯渇。その結果争いが絶えず、社会は疲弊し、種としての生存能力が低下し滅亡に繋がる。

以前にも述べたが、現在70億人の世界人口を養うためには、地球が1.4個必要なのだそう、過密人口は即破滅に繋がる。その引導を渡す担い手は、利益優先の人間活動が作り出した悪魔「多剤耐性菌」であろう。日頃軽蔑していたバイキンである。似たようなことが最近、米国で除草剤ラウンドアップ（有効成分グリホサート）に対し、雑草が「耐性」を獲得し、強烈に繁茂し、大豆・トモロコシの生産コストがグンと跳ね上がった。人間は自然を征服したとするのは、とんでもない思い上がりである。滅亡への道は、ヒタヒタと押し寄せてきている。人口抑制を図れないのなら、人類は智慧ある生き物とは、到底言えない。最後に私にとって一番恐ろしいことは、想定はしているが「ボケ」である。悲しいかな既に、人の名を忘れるなど、静かに進行中である。急加速しないことを、ただひたすらに祈るばかりである。

この頃は、一日一日が大切に思えて我武者羅に動いている。一つ一つの出来事に意義を感じる。そんな中で合う一人一人が(今日合えてよかった)と思える。年齢の所為であろうか。短くなってきた時間への愛着であろうか。生きる事への欲であろうか。

宇宙、地球誕生からずっと続いてきた生命の受け取り人である今の私、そしてこの後も続くであろう生命の受け渡し人である私だと考えると凡人以下の私でも生きていることに胸を張っていられる。

個人や社会が向上する為に『欲』はとても大切な事だと思っていますが、許し難い出来事を招くのも私達の持っている『欲』が源になっているように思う。戦争あり、テロ活動、日常諸々の事件、出来事など。市内でも大きな事業の取り組みが進んでいる。目的は尤もらしいがそこに群がる人々と欲得問題の陰が蠢いているを確かめていかないとと思う。私が意義を感じて行っている事も欲得からかな…と首を傾げてみることもある。そんな時とても良い切っ掛けに出合った。

本堂の屋根瓦が大部葺かれにきた。寒い日も暑い日もご苦労だった。震災時も一枚たりとも落ちなかった。本堂の壁の内、外面に彫刻が埋められる。その下絵を住職から依頼された妹の姿には頭が下がった。彼方此方走り、専門的な資料を求め勉強が始まった。妹の感動や意欲的な様子が伝わってくる。話を聞くことが喜びの一つになった。釈迦の生涯を「釈迦八相」の八つの場面で表現する物、その教えを当時に民衆により解りやすく説

かれた法然上人の苦難に満ちたお姿を描くためにと、奔走している。家族の一員としても懸命であり、絵を通して美を長い年月貯蓄してきた力によるものと妹の姿に敬服する。彫刻やその姿が寺のあり方や人の生き方にも大きく役立って欲しいと願う。極楽の絵、地獄の様子も出来上がりつつあるようだ。描こうとしているものの中に何を見るか、未来に向けて力を注いでいる住職の努力に何を感じるかは、ここを利用していく人々の目に、心に係っていると思う。韓国の寺を尋ねた時の気持ちと同じだ。韓国の寺の本堂の内、外の壁面、扉全体に大きく描かれ色彩は鮮やかだった。釈迦八相の場面は勿論、中国から朝鮮へと教えを伝える僧、朝鮮内で布教した僧の姿が物語り風に描かれていた。一つ一つを見ながら僧侶や絵師のことを思い巡らしていた日と変わりない。

生きていく中での経験はさまざまだが、こういう世界を味わった人もいるのかと、半信半疑の中に感動もあった。

『六十歳過ぎて間もなく旦那を亡くした女の人の話しだった。旦那を亡くして淋しかった。その上苦労が増えた。九十過ぎた姑さんと二人暮らしは自分の体の方がまいるのじゃないかと心配だった。姑は体は丈夫でよく働いてくれたが、息子に先立たれた辛さから毎日悲しんで泣かれたことは私も辛かった。そんなある夜のこと、何の花か分からないが沢山咲いて美しい景色が見えたという真中あたりに赤い橋が架かっていた。その向う側で夫が立っている。懐かしかった。手招きしながら呼んでいる。

「早くこう、お母さんのことでは散々苦労したんだ。今も愚痴聞いてんのか。早くえう。俺んこ

さ、早くこう」と何度も声をかける。

「父ちゃん、元氣か」と言おうと思ったが声が出なかった。旦那は「早くこう。こっちさこう」と何度も言っている。(うんだな、行くかな)という気持ちもあったが(だめだ、おっかさんがいつかだめだ。まあだ行けねえ)と必死で言ったような気がする。すると美しい花も赤い橋も、そして旦那も消えてしまった。姑さんにはその話はしなかったという』

きつと今迄とは違う気持ちで姑さんと過ごしたと思う。

『八十五歳を過ぎたお爺さんの話しだった。奥さんを亡くしてもう六年も経ったそうで、二人でいる時は大した話もしなかったが、いなくなると初めて話する相手もない辛さを知ったそうだ。体調をくずしたと思ったら手術を必要とすることになり、納得もした。医者は簡単だと言うが本人にとっては大ごとで心配だったよ。もう五十年から掃除をしてきたお堂の地蔵さまに初めて欲深いお願いをしたよ。

「五十年掃除をしてきやした。今回だけはわしの願いを聞いてやってください。どうかお力を貸してやってください」
勿論(助けてください)とお願ひしたよ。手術の当日は長い時間かかって不安だった。気がつくとき電図の波がゆっくりになって止まりそうだった。その時、三途の川が見え橋も架かっていた。その向うで婆さんが、

「おめえ、早くこう。そうた苦しいことやってねえで早くこうよ」

と花東かかえて手招きしている。婆さんと話してもしたいのが正直、どうすつか迷った。婆さんは

必死で呼んでいる。その時、お地藏さまが現れて錫杖を掲げると光が出て、光は機会に入った。それと同時に心電図の波は強く動き出した。と同時に婆さんは三途の川の流れに流されていった。花も流れていった。医者さまが（はい終わったよ）と声をかけてくれた。本当によかったよ。生きることにはまだまだ欲があんだな。婆さんには悪いけどなもう一寸こっちにいさせてもらおうべよ』

『お爺さんは今迄のように精出しているようだ。』

『定年後、仕事を捜してもなく家族が出はらった後、一人でいると詰まらない事ばかり考えている。動こうともせずテレビを見て一日過ごししているという人の話しを聞いた。』

昼寝ともつかずとうとうしていると仕事を一緒にしていた友が声をかけてきた。よく酒を一緒に飲んだ仲良しだった。川があるわけでもない。橋があるわけでもない。向うの方から、

「おう。此方さこうよ。一杯やっぺ。何くよくよしてんだ。酒飲んでパアツとしろよ」

と手招きしている。返事をしたいと思ったが声が出なかつた。（酒を飲む金はないし、其れ所じやない）という気持ちが強かつた。その時友はスウーツと消えたという。目が覚めて恐ろしかったそうだ』

自分に負けている自分に気がついて生活の仕方を工夫してみた聞いて安心した。

私には苦しさや辛さの経験が足りないのかこういう世界を覗いたことはなかつたがこんな世界も覗いてみたい気もする。

若い時の坊さんの話しを常に心に置いてある。

「ここに二つのお部屋がございます。地獄と極楽のお部屋です。どうぞゆっくりご覧ください」

と話は始まりました。二つの部屋の大きさも同じ食卓の大きさも、そこに座っている人数も、人の前に並んでいるご馳走の大皿も、長い箸の数も全く同じでした。ただ違うのは地獄の方の部屋、食卓の上には食べものが散らばっていて、人々は怒り合っています。極楽の方は笑顔で語り合いますが食事をしています。こぼしたりしていません。その理由はただ一つでした。地獄の方は長い箸を持つてご馳走を自分の口に入れようとして入らないのです。極楽の方は長い箸を使って前の人の口に入れてあげています。お互いにやっけてあげていきます。地獄も極楽も現実の生活の中にあることを知った日でした。

知らない世界を覗いていくことが生きる喜びに繋がっているように思う。そこにある地獄世界に負けることなく、喜怒哀楽を表現しながら、数多い覗きをしていこう。時間も少なくなっているのだから一つに集中しなくても（どうせ出来ないんだから）いい、いろんな世界を覗いていきたい。

思いははや11月公演へ

小林幸枝

6月公演は、私にとつて記念すべき公演だった。朗読舞を始めた頃には、まさかプロのダンサーとの共演があるとは思ってもしなかった。

2月の美浦村の陸平遺跡・縄文の森コンサートでモダンバレエの柏木久美子さんと共演します、と言われても、モダンバレエとはどういうものなのかも知らなかつたので、ハイ分かりましたと言っていたのですが、実際に稽古に入つて柏木さんの舞にはびっくりしました。

プロの舞を舞台に観た事もなかつたし、目の前で見た事もなかつたので、その大きな存在感には圧倒させられました。

縄文の森コンサートが終わつて、6月公演の準備が始まる頃、白井先生から6月公演で、もう一度柏木さんと一緒に舞台づくりをすることになりました、と言われてまたまたびっくりでした。

先生からは、ギター文化館のステージでは、縄文の森コンサートよりもっと厳しいプロの洗礼を受けることになりますからね、と言われたのでした。

柏木さんの一人で舞を舞われるときには、柔らかに優れきれいな舞だな、と思うのですが、一緒に舞を舞うと、柏木さんの体が二倍にも三倍にも大きく見え、私の舞なんか押しつぶされそうな感じになってしまいます。柏木さんの大きさに何とか負けないようにと必死に頑張ると、柏木さんの舞は更に大きくなって、舞台上に大きな竜巻が起るような感じに迫ってくるのでした。

舞台は命を懸けた戦いと同じだと、白井先生に言われていましたが、そのことを今初めて実感することが出来ました。柏木さんと舞っている時には自分がイメージできる最大のスケールでの舞を創らなければならぬし、私これが最高最大の舞だろうとイメージを舞いに表現すると、柏木さんはそれを優しく受け止めて私よりも何倍も大きな舞に返してください。

白井先生からは、普段、上手だとか下手だとか馬鹿な事を考えない事。そんなことを考えたり気にしていたらプロとしての大きなスケール感を持つた表現は出来ません。そういわれていましたが、そのことの意味を実践の中で柏木さんに教えてい

ただきました。

また何時か一緒に立てることを願っています。8月は2週間ほど夏休みを貰い旅行に行ってください。旅の中でいろいろなことを体験し、自分の舞を大きく、美しく完成させていきたいと思つていきます。

11月の公演は、ギター文化館の講師を務めるギタリスト大島さんとの共演で、また少し新しい挑戦となります。

【特別企画】

虚構と真実の谷間

打田昇二

第三章 因果応報の範囲(3)

治承四年頃は律令制度の崩壊で諸国国府の大部分が廢墟と化していたと想像されるが、常陸国には鹿島神宮が置かれていたので、その祭祀を任務とする国府は辛うじて残されていたのである。

大掾職を世襲する桓武平氏系大掾氏は、その立場上で、好むと好まざるとに関わらず源頼朝を最敬礼でお迎えしなければならなかった。常陸国府の会議室で「佐竹攻略」の軍議が開かれたが佐竹の居城である金砂山城は天嶮に守られた要害の地であるから正面から攻めれば味方の損害も大きい。

そこで参謀・上総介広常の提案により先ず謀略を仕掛けて敵を攪乱させることとなり、広常が常陸太田近辺に間者を放ち「源氏軍は、心を改めて従う者は罰しない罪を許して家臣にするらしい」などと調子の良過ぎるデマを流させた。

その効果が有ったのか、無かったのか、佐竹氏内部に意見の相違が表れた。抗戦派の代表が隆義の兄で子が無かった為に隆義に家督を譲った忠義と隆義の次男・秀義の二人、そして帰順(開城)派の代表が隆義の長男・義政である。議論は続いたが平行線で結論が出ない。義政は自分一人でも上総介広常に連絡を取り、数名の家臣と共に城を出て頼朝の陣がある石岡に向かった。言わば仲介役の広常は佐竹一族と聊か(いさか)僅かな縁のある人物なので、義政は安心していた。

一行が国道三五号線で園部川を越えようと大矢橋にさしかかったとき、御世辞を言いながら佐竹義政に連れ添っていた上総介広常が、突然に義政を斬り、何処に隠れていたのか源氏の兵たちが周りを囲んで義政に従っていた佐竹の家臣を捕らえたのである。斬られた義政は、さらに首と胴を分別され胴は園部川に捨てられた。広常は義政の首を川岸に陣幕を張っていた源頼朝に見せてからさすがに気が咎めたのか、園部川の岸に埋めた。

その後、源氏は金砂城に籠った佐竹軍を攻略する為に名のある武将たちを総動員させ、数千の軍勢を差し向けながら手こずった。最終的には又しても卑怯な謀略で当主・隆義の弟・義季を裏切らせ、ようやく金砂城を落としたのである。抗戦派の代表で有った二人のうち、忠義は討ち死にし、秀義は逃れて各地を放浪した後、大掾氏を頼り頼朝に降伏して許された。此の説を素直に受け入れれば良いのであるが、帰順した義政が簡単に斬られ、しつこく抵抗していた秀義が許されたことをヒネクレて考えると、佐竹氏内部に相対争いのようことが起きていて、上総介広常がそれを上手く利用して頼朝に常陸国を制圧させたのでは無

かるうか：「下司(げす)の勘繰り」であるが。

こうして上総介広常の大活躍?により、源頼朝は東国支配の重要課題であった常陸国支配を成し遂げた。筈であったが、翌年に現在の美浦村、阿見町、牛久市、龍ヶ崎市、稲敷市辺りに居た叔父さんの志田義広に背かれた。身内の反乱で頼朝も、佐竹氏が簡単に服従出来なかった事情を察してくれば良いのだが、勝ちに乗って天狗になっているから無理であった。治承四年十一月十六日に源頼朝は鎌倉へ帰り、三浦一族の和田義盛を侍所別当(さむらいどころのべつとう)に任じている。此の職務は幕府直轄の武士を統括し、戦時には軍隊を監察する役で大きな権限がある。

平家軍でこの役に就いていたのが富士川の合戦で失敗した上総権介平忠清(悪七兵衛景清の父)であり、和田義盛は頼朝と一緒に安房国へ逃げる途中の船中で、ドサクサに紛れてこの役を貰うように頼朝と約束をしていた。如何なる場合でも約束とは慎重に、という教訓であるが：此の俣では頼朝の挙兵当時から苦労してきた他の武士団から妬まれる。果たして、次官に当る「所司」に補職されていた梶原景時が或る日、「一日だけで良いから交代してくれ」と言つて「別当」の座に着き其の俣で別当職を奪ったようである。これは頼朝が「景時のほうが適任」と判断して替えたものと推測されている。その上、頼朝の死後に和田義盛の一族は北条義時に滅ぼされる。儲かる国司の座を望んで叶わず將軍に反逆した罪だと言われるが、北条氏の権力を増す為に消されたのである。和田義盛が、言わば頼朝の苦境を利用して権力の椅子を得たことの代償が大きかったのである。

鎌倉幕府は、平氏の政権と違って、やたらと身

内の者を処罰したことは先に述べたが、頼朝自身が断罪した百何十人の中で「三人だけは無実だった」と頼朝が言い訳をしたのは源範頼と一条次郎忠頼と上総介広常であり、この三人については何か弁護してやらないと気の毒ではあるが、取り敢えず頼朝の挙兵時に功績があり、また佐竹討伐に暗躍した挙句に消されてしまった大豪族・上総介広常の取り上げてみたい。残る二人は他にも用事があるので、この章の「後編」に登場して貰う。特に一条次郎忠頼は影の主役になる。

桓武平氏の流れを汲む上総介広常の七代前は、「平将門の乱」で終始一貫して中立を守り乱後には将門の遺児たちを庇護したと伝えられる平良文である。第二章でも触れたが、常陸国内に於ける此の人の領地は将門が父親から相続した旧・結城郡内にポツンとあるのみで少ない。長兄の国香と同じく鎮守府將軍になり、後に武蔵大掾職に任じられたので主な領地は武蔵国内にあったらしく秩父、畠山、土肥などの武士団の祖とも言われる。

平良文の嫡子・忠頼は平将門の遺児(娘)を妻にしていたとする説があり、その子が源頼信に退治された忠常であるが、忠常は祖父・将門の遺志を継いで決起したとも言われる。この忠常か又は父・忠良の代わりから上総国の次官である上総介に任官して房総半島に勢力を伸ばした。上総国は常陸、下野と並んで親王の任国であるから「介」は事実上の長官になる。石岡には大掾職を世襲した国香の支流が常陸介の下に居た。上総介は現地ナンバーワンで官位も上にあるから一国を自由に出来る。官職の「上総介」を姓とし、一族が「千葉介」を名乗って下総国に君臨していた。平家の政権下であっても桓武平氏は大目に見て貰える。

それで石橋山で負けた頼朝が頼朝でいった際には膨大な数の軍勢を抱えていたのである。

房総半島に流れて行った際の源頼朝は、数えるほどの家来しか居らず、未だ周辺の武士団も平家の威光を恐れていたから、上総介や千葉氏が味方しなかったら鎌倉時代は日本の歴史に無かった。既に述べたように、源頼朝は数え切れない程の危機に遭遇しながら、誰かの手助けによって危機を乗り越えている。初めの中は受けた恩を手帳にメモしていたのだが、味方が増えて自分の地位が上がってくると「喉元過ぎれば熱さを忘れる」とか「狡兎死して走狗烹らる(こうとしてそうくららる)」などの諺(ことわざ)が適用されてくる。

上総介広常の方でも「俺は源氏の功臣であり大豪族だ」と言う意識を持っているから既に述べたように馬上で頼朝に行き会っても下馬をしない。佐竹氏が滅ぼされた翌年の夏に頼朝は五、六十人の家臣を連れ夕涼みに浜辺へ出た。その時に広常も浜辺に待っていて頼朝には馬上から一札をして済ませた。頼朝に従っていた三浦義連がそれを咎めて「下馬されよ！」と言った。広常は「我が家は公私共に三代の間、未だ下馬の札を執ったことがない」と言い放った。一行は其処から今は亡き三浦義明の屋敷へ行って三浦義澄が酒宴の座を設けた。武士たちが酔って無礼講の様になった際に岡崎義實が、頼朝の来ている水干(すいかん)、素材が涼しく出来ている武士の衣服をねだり、貰って嬉しそうに着ていた。

それを見た広常は「この様な美服は俺のように大功の有る者が着るべきものだ」と言って取りあげようとし、二人はお互いの功績を言い合って大喧嘩を始めた。頼朝は、黙って見ているしかなか

った。主の三浦義澄が二人をたしなめて、何とかその場を収めたのだが、この頃から草創期の勲功を誇る広常の態度が頼朝以下、武士団の中で嫌われるようになったのかも知れない。

寿永元年(一一八二)八月十二日、北条政子は二代將軍となる頼家を生んだ。この時に産屋の屋根に鎬矢を射掛け悪霊払いをする「鳴弦(めいげん)」という古来からの重要儀式があり、その主役である引目役を上総介広常が務めている。その頃は木曾義仲が信濃から起こって都へ攻め上る徒上にあり、京都から西に平氏が居て、源氏は鎌倉で東国武士団を把握している状態であった。その引目役を最後に上総介広常に関する記事は鎌倉幕府の公式記録「東鑑」から消える。

上総介広常が殺害されたのは寿永二年の暮(ころ)と推定される。合戦に行かない武士は暇であるから広常は誘われる俣に梶原景時と双六(すくろく)で遊んでいた。その時に些細なことで二人が口論となり、景時がすかさず広常を斬ったのである。遙か後代に浅野内匠頭長矩は江戸城内で吉良上野介義央に斬り付け、たいした傷でもない程だが切腹を命じられた。鎌倉宮中で起きた刃傷事件は大騒ぎになったけれども頼朝以下、他人ごとのような顔をしていた。そのことから、頼朝が景時に命じて広常を斬らせたことは明白なのである。或る史書は、後白河法皇と会った際に頼朝が「上総介広常は最大の功臣ではありませんけれども、天皇に対して謀反心を持っていたので殺しました」と言い訳をしたと書いている。「天皇に対して謀反心を持っていたのは頼朝公のほうですよ」と広常が生きていれば言ったかも知れない。

寿永三年元旦に源頼朝は鎌倉の鶴岡八幡宮に参

詣をし「去年の冬に広常のことで穢れがあつた」としてお祓いをして貰つた。穢れが自分自身であることには気がつかなかつたようである。当時は神仏混淆なので法華経も講じて貰つた。正月八日によく上総国一宮の神主から「上総介広常殿が奉納された鎧兜が当社にあります。如何が致しますようか」と言う申し出が有り、頼朝が使者を使わして調べてみると、先に述べたように「武衛（頼朝公）の御運を祈る」と書いてあつたので頼朝は大いに後悔をした。後悔しても広常は生き返らないから、捕らえていた一族の者を釈放した。

広常を斬つた梶原景時も、源義経をはじめ多くの武士から憎まれた人物で後に失脚し、各地を放浪して野武士に討ち取られたため怨霊の祟りだと言われた。そう言う意味では上総介広常も威張つた報いがあり、石岡の大谷橋で帰順した佐竹義政を斬つたから、崇られる資格は十分にある。それを命じた頼朝も神様が命じた任務が終わつたからか、苦勞して鎌倉幕府を開いてから十年も経たず怪しい死に方をした。妹の旦那が亡くなつて、その法事に行く途中で馬が暴れて墜落死したと言われるが、北条氏による暗殺説もあるから尋常では無い。何しろ大勢を抹殺しているから怨霊のお世話になるには申し分が無い。源頼朝にまつわる複雑な人間関係、特に流人として伊豆・蛭ヶ小島に居た頃の話は地元武士団の因縁と絡んで後編で展開させて頂くが、或る一人の武士に依つて頼朝の運命が大きく変えられたばかりか、多くの人物が影響をうけることになつた出来事である。

源氏は酷かつたが、身内の殺し合いが無かつた平家も自分たちの都合で多くの敵を作つている。その所為かどうか、平清盛も高熱に焼かれるよう

な最後で「清盛煩熱を病み冷水に浴す。水輒（たちまち）沸く」と日本外史は伝えている。源氏、平家と言つても根元は同じであり両者とも多くの支流が勢力を競つて潰し合いをしたに過ぎない。後に徳川幕府が諸大名の「家系」を申告させた際に、殆どの家は源氏や平家の適当な人物を祖先にしている特に源氏が多かつたと言われる。徳川家康自身も清和源氏を自称している。

どうしても武家は鎌倉時代の後遺症で「源平」を祖先にしたがり、それも平氏より圧倒的に源氏が多いのだが、それには理由があるようで先ず、平清盛は合戦上手な武士ではあつたが、政治家として大成した人物であり、文官として最高位の太政大臣（従二位）になつた。それに対して源頼朝は既成の官職には興味を示さず、権大納言兼右近衛大将（三位相当）に任じられたのを一か月で返上し「征夷大將軍」を望んだのである。

征夷大將軍という職務は、古来から反乱などの鎮圧に際して任命される臨時職のようなもので、近代で言えば「海外派遣」などの指揮官程度の職務であり、官位も地方国司程度の従五位に過ぎないのだが、軍隊を統率することになるから強大な軍事力を持つ。源頼朝はそれを利用して律令制度の崩壊で形骸化した国府、国司に変えて諸国に「守護」「地頭」を置き、従来の政治機構を棚上げした幕府という権力基盤により日本を支配した。つまり平氏は官位官職という老舗の看板に拘り、源氏は店の資本に執着したことから力を身上とする武家が「源氏」を目指したのである。もう一つ、源平の違いを「源氏は天皇からの枝別れ、平氏は親王または王からの別れ」とも言われるが、何処から生えようと枝は枝であり、幹には戻れない。

イスラエルの諺のように「先祖から子孫」へと伝わる因果を避けることが出来ないとするれば出来の悪い幹から生じた枝は、全てが剪定に相当するのであるか？ そうかと言つて幹だけで樹木が育つわけもない。要は良い枝だけを残して他の枝は残すことになるのであるが、それでも切られる枝にも言い分があり、残る権利が有ると思つていればそこには怨念が生じる。

「因果応報」の原理に依ると、過去の善悪の業に応じて現世の果報が幸・不幸に分かれ、現在の業に応じた未来の果報が生じるらしいが問題はそれが適用される時代である。子孫と言つても幅が有り過ぎるから、祖先の因果をどの時代に受けるのか、誰が受けるのか、それを決めるのは誰か？ 源頼朝のように神の御加護で危機を脱しながら協力した多くの人物を粛清した者もいる一方で池禪尼や平宗清のような人物も居るから一概には言えないのであろう。源頼朝は平氏を全滅させたが、池禪尼が生んだ平頼盛を厚遇しているし、平宗清には恩を返そうとした。しかし宗清はそれを断り負けると分かつている平家陣営に戻つて討死している。頼朝は僧になるのを止めた頼頼源五にも褒美を与えているから平家に対する恨みを温存していなかつたとは言ひ切れず本心は分らない。平家一門にしても天下を取つていた時代に多くの者を泣かせており、簡単に言えばその怨念で滅びたようなものだが、権力は不滅ではないことも示している。立派な枝から出ながら争いを続けた源氏と平氏の愚かな歴史を顧みると、雑草から枝別れたような庶民は、他人に酷いことをした奴はやはり個人の負担でそれぞれの因果に合わせた報いを受けて貰いたいと切に思うだけである。

【特別寄稿】

陸平をヨイシヨする会会員 柏木(小峰)久美子

(1) 『ことば座公演に出演して…』

ふるさと風の会の皆様、昨年からお世話になっています。いつも温かく迎えていただいております。ありがとうございます。

今年2月の縄文の森コンサート(陸平をヨイシヨする会)が初共演ですが、美浦村社会福祉協議会の助成を得て、手話ワークショップとオカリナワークショップのふたつを1月に開催しました。これらのイベントを通してお互いに相手を知ったように思います。

今回、ギター文化館では、「音の響き」の美しさと「ドーム天井」の素敵さにうっとりしました。動きながら天井におもわず見とれました。そして風の会5周年記念展の展示と舞台の一体感がなんともやさしさを表して踊りやすかったです。

即興に近い小林さんとの「舞い」は適度な緊張と高揚感があります。私の通常の創作は、「振付をする」：動きをつけていくことで、生演奏の場合でも作曲してもらいます。今回のことば座の公演では、舞いの長さやきっかけは語りに合わせていますが、語りも「生もの」ですから「どんな読み方をしようか」といいながら：語り方を白井さんがいろいろ工夫します。

音楽は野口さんと恵子さんの即興です。音楽リハーサルは2回のリハーサルと本番初日のリハーサルの3回でしたが、「舞い・朗読・音楽」の息がだんだん合い、深まっていくのが感じられました。

3日間の公演は3日間全部舞いが違い(音楽も)大変面白いものでした。

私の舞いは「テンジェスチャー」というメソッドを使っています。アメリカのモダンダンスの先駆者の一人、伊藤道郎のメソッド(AとBそれぞれ10のジェスチャーがあります)を私は伝承しています。伊藤道郎の作品だけでなく、メソッドを使った創作にも力を入れています。ですから、ことば座との共演は私にとつてのチャレンジで、機会を作ってくださった白井さんに感謝しています。小林さんの舞いが大きくなったことも私の喜びのひとつです。心が柔軟だから小林さんはまだまだ伸びると思います。楽しみです。

また、ギター文化館の喫茶コーナーと蕎麦「ふらの」に「縄文の森コンサート」の写真を飾ってくださいありがとうございます。私たちの活動の励みになります。また次の共演を楽しみに。

(2) 山百合の里コンサートを訪れて

7月18日に行方市の山百合の里コンサートへ行きました。

久しぶりの夫とのドライブは、土浦まわりで行くか、潮来まわりで行くか考えたところから始まりました。結局、道が空いているだろうということで潮来まわりを選びましたが、潮来からちょっと迷い、野口さんの地元行方に着きました。

コンサート会場は参道を抜け、田んぼを渡った小高い林の中で、新しく橋も出来て山百合が見やすいようになっていました。

会場に着くとすでにヒロ爺が到着していて、「早かったね!」

：(遅かったかしら?)

ことば座の公演以来の再会です。

「公演はとっても疲れたよ!」

：(私って疲れさせる女かしら?)

しばらく山百合を見学して、いよいよコンサートです。私はお気に入りのビデオを持ち、夫はカメラを持ち、それぞれ思い思いに撮ります。野口さんの生徒さんの演奏や、かわいい子供たちの飛び入り参加は心和むひと時でした。

つい、演奏者の顔を見てもいますが、田んぼの稲が風になびく様子や山百合などをながめながら聞くとき心地よくなります。野口さん特製のオカリナペンダントを胸にして、「ピー」とひと吹き吹いたら胸が「すー」とするでしょうね。

帰りに里山の整備と山百合の保護育成の活動をしている井上山百合の会のみなさんから、蒸しじやがいものおもてなしを受けました。冷たい麦茶とともにごちそうさまでした。

《ふじの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・蕎麦会席
料理のお店です(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「つらつら」ちゃん
皆さんをお迎えいたします。

電話0296-44-0000

【風の談笑室】

政治の悪い時は、その社会を取り巻く環境の全てが悪い方向に向く、と言われているが今年はどうやらその通りの年になりそうである。

3月に発生した東日本の大震災は、地球上に暮らす以上避けられない自然災害である。しかし、避けられない自然災害に乗じて、想定外で片付けようとしているとんでもない人災を引き起こしている。全く救いがたい猿知恵である。いや、猿が聞いたら怒るだろう。これは「人知恵」と言わねばならないだろう。

想定外で片付けようとする人災についてはもう話すことも嫌になるのだが、改めてこの忌まわしき現代のバベルの塔を、子等や孫等、孫孫の為に確りと総括を語り合うことは重要なことである。

自然災害は、地震ばかりではない。異常気象と言うのか、或いは乱気象と言うべきなのか、かつて例のないゲリラ的集中豪雨による洪水、崩落災害をもたらしている。

6月には梅雨のさなかに早々と35度を超す猛暑日を記録した。しかし、例年より早い梅雨明けを宣言した途端今度は冷夏の様相である。気象のこうした乱れはバベルの塔と同じく驕った人間どもへの天罰と言えるだろう。そうするとやはりこれも人災という事になる。

人間とは殺戮の動物である、とは誰かの言った言葉である。現代においてもまだ大量殺戮を強者の当然の権利とばかりに行っている地域もあるが、基本的には殺戮行為は非道であることが

浸透してきている。

その所為だとは言わないが地球上の人間の数は既に自然のバランスを失った数にまで膨れ上がっている。明日にも大変な食糧難となり、一瞬にして何億かの人間が飢え死にすることになる。こうした話を、菅原兄は何時も動物学、生物学の立場から書いておられ、無責任過ぎる現代人に対する警鐘を鳴らしておられる。

コーヒーフレイク

『それでも漁師は海を恨まない』

三陸のリアス式海岸は、津波の被害はいつも甚大だ。狭い谷間でV字型の川沿いは、押し寄せた海水が逃げ場を失い、奥へ奥へとせり上がり、巨大な被害をもたらす。今回も宮古市姉吉地区は、40.5メートルもせり上がった。「リアス」はスペイン語で「塩入り川」という意味だそうで、元々川が削った谷に、後で海が侵入した地形なのだそうだ。

「森は海の恋人」を合言葉に、岩手県の地元漁民は、川の上流域に森づくりを励み、森・川・海の連携で、豊富な酸素とミネラル・栄養分が海に注がれ、海藻や魚介類が豊かに実って返ってくる。

以前、赤潮で収獲が激減した海も、今は森づくりで綺麗に甦り、特にカキ・ワカメなど養殖漁民は、海の恩恵を身に沁みて感じている。たとえ津波で、家族や家を失い、船や筏を流され、これだけ海に蹂躪されても、決して彼等は海を恨まず、感謝の念で復興を誓うのだという。人は自然を征服したと、奢った気持ちがあれば、その逆襲を恨み、逆に自然によって、人間は生かされているという謙虚な気持ちがあれば、決して津波などを、恨むことはないのだという。

(菅原茂美)

当会のHPを立ち上げ、その製作及び更新をやって頂いている木村兄の「まほらに吹く風に乗って」と題したブログは、毎日の楽しみの一つになっている。

仕事先から家まで、そして霞ヶ浦周辺の歴史探訪を写真入りで書かれている。このブログを見ていると、私達の足元には如何に沢山の宝が眠っているか解る。この一週間の紹介記事を見ても、坂谷の松並木、真鍋宿、常陸七福神、消えた真鍋公園と正岡子規、難読地名・嘉良寿理、うな井発祥地「牛久沼」、潮宮神社と木村兄の日常動線上の興味深い歴史と文化が紹介されている。

また、木村兄のHP「1300年の歴史の里・石岡ロマン紀行」では、石岡市に纏わる歴史ロマン、観光名所などが詳細に紹介されている。ぜひ一度見て頂きたいと思う。

木村兄のHPとブログを見ると、自分たちの足元にいかに多くの宝物が潜んでいるかがわかる。また同時に、その宝物の本当の光をとらえることが出来ず、薄っぺらな光物だけに目を奪われてきたのかも良く解る。

この町に越してきて、最初に聞いた言葉が「歴史では飯が喰えん」であった。だが木村兄のブログやホームページを見るとホルモン料理の工夫を知らないし、工夫を考えようとしないう。出来ないとはいえない。因みに「ホルモン料理」のホルモンは、一説に放るもの（捨てるもの）にホルモンをかけて作られた言葉だという。木村兄のブログ・HPを見ながら、石岡ホルモン焼きを考えてみるのもいいのではないだろうか。

少し前のこと、ブログ「まはらの風に吹く風に
乗って」の添付写真を見ていてふと左記の詩が
口をついて出た。

『風のこえ』

何時も呼んでいるのに

なぜ聞こえないふりをするのですか。

あなたがきつとわかる様にと

私の言葉を文字にも書いて風に声しているのに

あなたは何時も聞こえないふりをしてしまう。

それは私の事を嫌いだという事ですか。

かまいませんよ。

あなたに嫌われても私はあなたを呼び続けます。

そして、

私の呼ぶ声を風に運んでもらいますから

(ひろぢ)

この8月は、どんな夏になるのだろうか。無理
な節電をしてくれぐれも熱中症にならないように
していただきたい。暑い場所が大好きな我が家の
お猫様であるが、7月の初旬に蒸かえる納戸に寝
ていて熱中症にかかった。慌てて病院へ連れて行
き大事に至らなかつたが、人間さまも気を付けな
ければならない。

暑中お見舞い申し上げます。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ふる里とは、物語の降る里です。ふる里に降り落ちた物語は未来への道標。守るべきは里に
降り落ちた物語を確りと伝えることです。ことば座は、里に降り落ちた物語を朗読と手話を
基軸とした舞（朗読舞）に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

第21回公演(11月11日~13日)

常世の国の恋物語百:第28話「湖の弦音(仮題)」

第21回公演は、ギタリスト**大島直氏**を招き、クラシックギターの弦音にのせ
「湖の弦音(仮題)」をお届けします。

モダンバレエの**柏木久美子**さんとの共演で一回り大きくなった**小林幸枝**の
舞にご期待ください。

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35

☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

オカリナ奏者野口喜広と脚本家白井啓治の

第2回 里山と風の声コンサート

9月11日(日曜日)開演 PM3:00(開場 PM2:30)

常世の国へふらりと迷い込み、雑木林と風に語りかけるしか術を持たぬ瘦男白井啓治と常世の海と陸に魅せられ大地に母の詩を土笛(オカリナ)に声する夫(つま)野口喜広と妹(いも)矢野恵子が出会い一緒に風に声することになった。

『土笛(オカリナ)が奏でる《5億年 生命の旅》』

日本最古のカンブリア紀の地層(日立市)から、一握りの生命のかけら(土)をいただき、土笛として奏でる。土笛は何を語るのか…?

《演奏曲目》海はふるさと、カンブリアの夢、モンゴルの風、荒野、グレートスピリッツ、
旅立ち、浜辺の歌 他。

《演奏者》野口喜広(オカリナ) 矢野恵子(キーボード) 及川克洋(ウッドベース)
田中文彦(ギター) 山下亮江(パーカッション)

『朗読ふるさと物語《新説柏原池物語》』

奇想天外!

「龍神山の龍は、何と大山猫だったとは…」

ふるさと石岡に伝えられてきた龍の伝説に、新しい命を吹き込むべき新解で脚本家白井啓治が書き下した物語を、作者本人と石岡市(旧八郷)出身の声優永瀬沙知が鎖連読というスタイルで語ります。

コンサート料金 入場券 ……3,500円

(事前にご購入の場合は3,000円) 小学生2,000円

ギター文化館 Tel 0299-46-2457 Fax 0299-46-2628